

十二月二十四日

大学は冬季休日に入ったのか学生の姿も少なく非常に快適である。これ位の人口密度が本来望ましいのではなからうか。北京計画の細部を考案。カナダ国籍の中国人で認知神経科（電気）を学んでいる学生から連絡あり、研究室に入室したいと言つ。上海Gスタジオやマイノリティーのための仕事に興味を持ったとの事。ホームページを見ての照会である。何処でどう読まれているか全く解らないのがITの現実だな。

十六時ソウルへ出掛けていた若松氏が今、成田に着いてすぐ研究室へ来ると言つ。明日はモスクワだつて。十七時過朝日新聞の若い記者来室。藤森建築について小インタビュー。これでは何か最近俺は藤森評論家になつてしまったな。マ、イヤ。

夕方新大久保駅前ガード下ソバ屋近江屋で 社長若松氏と会う。オイルビジネスがうまくいっている様で元気だ。私の周辺では中国も含めて彼くらいではないかな、古典的な意味合いで前向きで、いわゆる元気振りなのは、二〇時半迄、ソバとおでんと何がしかで気持ちをお休ませた。彼は明日からモスクワで、ハードネゴシエーションを続けなければならないようだ。私にはもう彼のような粘り強いエネルギーは失せている。残念ながらこんな風に走るのには彼に任せなければならない。しかし、若松氏の精神のリアルさは今でも理解できるような気がする。堀田善衛が「インドで考えたコト」で述べていた、インドに向かう飛行機の中で隣に座っていた商社マンの、腹巻きに万札をしこたまはさみ込んだ風の間

のリアルさである。まだ誰もそんな事を考えてもみなかった頃、インドの綿に商機を見て動いている本物の商人の精神である。今、若松氏はその最中にある。しかも、集団の一員としてそれを成そうとせず、単独行で成し遂げようとしている。信長、秀吉の時代の堺の商人を想はせるものがあるではないか。いささかオーバーだね。気が弱くなっているのだろうか。用心、用心。

明日は朝、現場で打ち合わせ。その後、少し打ち合わせをしながらはならぬ。